

# 塩嶺トンネル周辺の植生調査報告

## Vegetation der Umgebung des Enrei-Tunels im Mittel-Honshu

1978年3月

宮 脇 昭・奥 田 重 俊・佐 々 木 寧  
箕 輪 隆 一・弦 牧 久 仁 子

von

Akira MIYAWAKI, Shigetoshi OKUDA, Yasushi SASAKI,  
Ryuichi MINOWA, und Kuniko TSURUMAKI

横浜国立大学環境科学研究センター

Institute of Enviromental Science and Technology,  
Yokohama National University/JAPAN

岡谷・塩尻間環境調査研究報告書 別刷115～192 P.

Contribution from the Department of Vegetation science, Institute of enviromental science  
and technology, Yokohama National University. No. 56.

# 目 次

概 説 .....	115
I 調査目的 .....	116
II 調査地概観 .....	117
1. 地形・地質 .....	117
2. 植 生 .....	117
III 調査方法 .....	120
IV 調査結果 .....	122
1. 森林植生 .....	122
(1) モミーツガ群落 .....	122
(2) クリーコナラ群集 .....	122
(3) マツバスゲーハンノキ群集 .....	123
(4) アブラチャンケヤキ群集 .....	125
(5) イブキヌカボーケヤキ群落 .....	127
(6) ネコヤナギ群集 .....	127
(7) アオミズータチヤナギ群落 .....	128
(8) アカマツ・カラマツ植林 .....	130
(9) スギ・ヒノキ植林 .....	133
(10) ニセアカシヤ植林 .....	136
2. 草原植生 .....	138
(11) シナノザサ群落 .....	138
(12) ニガイチゴ群落 .....	138
(13) シバ群落 .....	139
(14) ヨモギ群落 .....	143
(15) カモガヤ草地 .....	144
(16) カゼクサーオオバコ群集 .....	145

(17)	ノダイオウ群落	146
(18)	スズメノテッポウーハコベ群落	146
(19)	ミゾソバアカバナ群落	147
(20)	ヤナギタデ群集他	149
(21)	アケボノソウーヒロハノドジョウツナギ群落	150
(22)	ヒロハコシロンソウーツルネコノメソウ群落	152
(23)	アゼスゲ群集	153
(24)	ヒロハノドジョウツナギ群落	154
(25)	ヨシ群落	155
(26)	イヌゴマーアブラガヤ群落	156
(27)	カサスゲ群集	158
(28)	ザゼンソウーヤマドリゼンマイ群落	159
(29)	アオウキクサーサンショウモ群集	160
V	塩嶺トンネル周辺現存植生	162
VI	植生指標による水環境変化の診断	164
	今後の方針	168
	参考文献	169

## 2-6 岡谷～塩尻間（塩嶺トンネル周辺）の植生調査

### 概 説

新しい自然開発とくに隧道の建設などは、必然的に水系の変化などによる自然環境に影響を与える可能性がある。たとえば地下水位の低下、水系の変化などが人間の生活環境や農作物などの産業にどのような変化を及ぼすかを適確に、しかも客観的に把握することは環境アセスメントの基本であり、重要な課題である。しかし、その具体的な変化や影響を科学的に把握することは容易でない。

もっとも総合的な環境の変化を生命を賭けて適確に示すのは、その土地に生育している植生である。とくに長い時間の経過の過程で多様な自然環境や文化景観内では人為的影響も含めた総合条件に耐えて生きのびてきた、移動能力のない植物群落は、その立地のあらわる条件の変化に敏感に対応する。いわば環境変化の指標であり、生きている警報装置である。

国鉄岐阜工事局管内の中央本線塩嶺トンネル建設現場周辺は海拔770～1,200mの低山地が連なり、その間を小河川が縫っている。植物生態学的にはブナクラス域の下部に位置している。既存植生と潜在自然植生を現地調査によって比較検討することによって、今までの水分収支も含めた自然環境、植生環境を植生を指標として判定することができる。

同時にそれぞれの立地本来の潜在自然植生と相互考察して、現在および将来にわたっての土壌水分の変化や地下水の変動による環境の変化を予測することが可能である。